

マオリ語における魚の成長段階名称について*

塩谷 亨

Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Maori

Toru SHIONOYA

要旨：マオリ語における魚の成長段階名称について、その区分の仕方と名称の形成法について分析した。区分の仕方としては、2段階区分又は3段階区分が多いが、最大で4段階の区分をする魚種もあること、複雑な段階区分がある場合には、成魚段階の手前の中間段階に別の名称が付与される場合に加えて、成魚段階よりも更に成長した大型魚或いは更に年を重ねた老魚について別の名称が付与される場合があることが明らかにされた。また、成長段階名の形成法としては、他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合がほとんどであるが、少数ながら、その魚種の代表的名称に別の要素が結合された分析的名称を用いる場合も見られた。また、今回の分析の結果とハワイ語及びサモア語の魚の成長段階名称について行った先行研究の分析の結果との比較対照を行った。

キーワード：魚種名 出世魚 ポリネシア諸語 マオリ語 サモア語 ハワイ語

1. はじめに

四方を海に囲まれ多くの川も流れる日本は古くから魚とのつながりが密接な地域であり、魚への関心は極めて高いものであった。そのような魚への強い関心は、魚種関連語彙の豊富さに反映している。その一例が、多様な「出世魚」、すなわち、魚の成長段階に応じて名称が変わる成長段階名称である。日本語諸方言に見られる様々な成長段階名称については、澁澤(1992)が分析し、その諸特徴を論じている。太平洋地域に無数に散らばる島々からなるポリネシアも文字通り四方を海に囲まれ、一部の島々には川も流れており、古くから魚が生活の重要な一部であり、関心も極めて高いものであった。その固有の言語であるポリネシア諸語も、日本語同様、豊富な魚種関連語彙を持ち、日本語に匹敵するほどの豊富な出世魚的な語彙システムを有する。ポリネシアの北端に位置するハワイ諸島の固有の言語であるハワイ語における魚の成長段階名のシステムについて、塩谷(2017)が分析し、その諸特徴を明らかにしている。また、塩谷(2022)は、ポリネシアの西側に位置するサモア語について分析し諸特徴を明らかにしている。本稿では、ポリネシアの南端に位置するニュージーランドの固有の言語であるマオリ語について、先行研究でハワイ語とサモア語を対象に行ったのと同様に、魚の成長段階名のシステムを分析し、その諸特徴を明らかにすることを目的とする。因みに、

先行研究で扱ったハワイ語とサモア語は、今回分析対象とするマオリ語と起源を同じくする同系のポリネシア諸語であり、語彙についても、魚種名を含めて多くの同系の語を共有している。尚、狭義の「出世魚」は成長段階により全く独立した名称を付与する場合（例：ハマチ>ブリ等）を指すが、本稿では、二つの先行研究と同様に、同じ語から派生した下位分類的名称が付与されている場合（例：シラスウナギ>ウナギ等）も分析対象の含めるため、引き続き、「出世魚」ではなく「成長段階名」という名称を用いる。

第2章では、マオリ語では魚の成長段階をどのように区分しているかについて、魚種別に一覧を示す。その際、マオリ魚の魚種名に関連する二つの論文である Phillipps(1947)と Best(1977)、それから、マオリ語の最も代表的な辞書である Williams(1971)に含まれるデータを分析対象とした。第3章では、マオリ語における成長段階名はどのように形成されているか、様々な魚種を比較した上で見られた傾向等を論じ、マオリ語における魚の成長段階名称システムの特徴を示す。第4章では、第3章で論じた内容について、サモア語とハワイ語について行った二つの先行研究で示された各言語の魚の成長段階名称システムの特徴と対照すると共に、マオリ語のシステムの諸特徴についての考察を行う。

2. マオリ語における魚の成長段階名

2.1. 魚種名と成長段階名の表示について

今回用いた資料の中で成長段階名を最も網羅的に示している Phillipps(1947)から成長段階名称を抽出し、それを基に他の資料から得られた情報を追加する形で、マオリ語における魚の成長段階名の一覧を示す。Phillipps(1947)以外から得た情報に基づく箇所にはその都度それを略号で示す。Williams(1971)、Best(1977)に基づく情報は、左端にそれぞれ、(W)、(B)のように表示し、特に明記がない場合には Phillipps(1947)に基づくものであることを意味する。尚、Williams(1971)は今回は第7版を用いたが、初版は1844年に出たものであり、その記載情報は Phillipps(1947)や Best(1977)にも一部反映されている。そのため、これら3点の情報については重なる部分もあるが、それぞれ独自の記述も相当数見られる。

表の左側には資料で情報が得られる範囲で、学名と、和名がわかるものについてはカッコ書きで和名を表示し、その右側に成長段階名称を展開する。尚、和名については、資料によっては、個々の魚種名までは特定できない事例が相当数あった。その場合は、資料から得られた情報により分かる範囲で学名と和名を表示する。異なる文献間で魚種を比較するためにはそれぞれの魚種の学名による同定が不可欠である。今回用いた3つの文献では学名の不一致は少なかったが、他のポリネシア諸語との対照の際にも、学名の統一は重要である。そこで、GBIF (Global Biodiversity Information Facility : OECD の勧告に基づき、世界の生物多様性情報を共有し、誰でも自由に閲覧できる仕組みをつくるために発足した地球規模生物多様性情報機構)のオンラインデータベースを参照して、学名を現在広く認められているものに統一した。出典の学名を修正する場合はその都度注で補足した。また、和名の特定には、同じく GBIF のオンラインデータベースと、日本産魚類全種の現在の標準和名の最新の情報である 木村(2020)と、補足データとして、日本魚類学会(1981)も用いた。また、英語での魚種名情報

が得られた場合には、英語辞書(研究社 リーダーズ+プラス CD-ROM 版)により日本語訳が得られる場合はそれを利用した。

また、類似した名称をまとめるために、必要に応じて、科名或いはそれより大きなまとまりである目名に言及する場合(例: キュウリウオ目、ボラ科)もある。成長段階名称は、若い段階から順に、幼魚、中間、成魚の順で示し、最も若い段階或いは最も小さい段階を左端に示し、右に進むにしたがってより成熟した段階、或いはサイズが大きい段階になるように並べる。同じ魚種の同じ成長段階において複数の名称が存在する場合には斜線(/)で区切って並置し、特定の方言の例とされるものと、類義語が提示されている場合には注で表示した。英語と日本語の基本的な対応としては、fry を稚魚、young を若魚、adult を成魚、old を老魚としたが、それに当てはまらない表現(half-grown、full-grown、when large 等)を含む事例の扱いについてはその都度説明を加えている。

マオリ語の表記には母音字として a、e、i、o、u の 5 文字、子音字として h、k、m、n、ng(=[ŋ])、p、r、t、w、wh(=[f])が用いられる。また、長母音はそれぞれ、ā、ē、ī、ō、ū のようにマクロンを付加して表す。しかしながら、文献によって、長母音を示すマクロンの表記にはしばしば不統一が見られた。

2.2. 成長段階名一覧

ウナギ(eel)と呼ばれる魚には多くの種類があるが、Phillipps(1947)は種を特定せずウナギ(eel)として、稚魚と若魚の名称を挙げている。それらに対応する成魚段階の名称は明示してはいないが、ウナギの一般名称として tuna を挙げているので、おそらくこれが成魚段階で用いられる名称と考えられる。また、種を特定していないので、様々な種のウナギに用いられる名称と思われる。尚、稚魚段階を表す名称 tuna-riki は小さい(riki)ウナギ(tuna)という分析的な名称である。それとは別に、方言として、種を特定して *Anguilla australis* というウナギについて成魚段階を表す名称が存在すること、それから、学名の明記はないが whakaau というウナギの種類について若魚と成魚の 2 段階の名称があることを示している。Williams (1971)でも、稚魚を表す tuna-riki と whakaau という種の若魚を表す kanaetea が記載されていない以外は基本的に同じであるが、成魚段階の名称 papakura については種を特定せず単にウナギ(eel)の成魚として記載されている。

表 1：ウナギ

学名（和名）	成長段階名称
学名未記載(ウナギ 種未特定) (w)	稚魚 tuna-riki > 若魚 ngaeroero > 成魚(tuna)
	若魚 ngāeroero/ ngorengore > 成魚(tuna) / papakura
Anguilla australis (ウナギ科)	成魚 papakura ¹
学名未記載（ウナギの一種） (w)	若魚 kanaetea / papawhenua > 成魚 whakaau
	若魚 papawhenua > 成魚 whakaau

成長に伴い変態するヤツメウナギの二つの成長段階について、Phillipps(1947)が、それぞれ異なる名称を報告している。Williams(1971)にも同じ種 *Geotria australis* を意味する単語として、korokoro、piharau / pihapiharau / pipiharau が挙げられているが、成長段階の違いには言及されていない。

表 2：ヤツメウナギ

学名（和名）	成長段階名称
<i>Geotria australis</i> （ヤツメウナギ目）	(velasia 段階) piharu / piharau ² > (geotria 段階) korokoro

マダイ属の魚について、Phillipps(1947)が稚魚、若魚、成魚を区別する 3 段階の異なる名称を報告している。Williams(1971)も長母音の表記が若干異なるが同様の 3 段階を記載している。

表 3：マダイ

学名（和名）	成長段階名称
<i>Pagrus auratus</i> ³ （マダイ属）	稚魚 paratete / paratohe / pepe tamure > 若魚 karati / parati > 成魚 tamure

スズキ目の魚 *Arripis trutta*（オーストラリアサーモン）について、Phillipps(1947)が稚魚、若魚、成魚に加えて、もう一つ中間段階として「ほぼ成魚」‘nearly full-grown’段階を加えて合計 4 段階の異なる名称を報告している。Williams(1971)も長母音表記に若干の差があるものの基本的に同じであるが、若魚として hāpukupuku が加わっている。⁴

¹ Ngati Raukawa 方言と明記されている。

² 類義語として、pipiharau / pihapiharau / kanakana (Ngai Tahu 方言)/ Nganangana が挙げられている。

³ 学名は *Pagrosomus auratus* となっていたが GBIF に従って修正した。

⁴ Williams(1971)はこの他、kōukauka と kūngongingongi を kahawai の同義語として挙げているが、どの成長段階を指すかは明示されていないため、表には加えなかった。

表 4：サーモン

学名（和名）	成長段階名称
Arripis trutta（オーストラリアサーモン.）	稚魚 tahuri > 若魚 kohere / koria / koukauka / kungogingoungi / kowaitau / kōwerewere > ほぼ成魚 puawai > 成魚 kahawai
(w)	稚魚 tāhuri > 若魚 hāpukupuku / kōhere / koria / kōwwaitau / kōwerewere > ほぼ成魚 puāwai 成魚 kahawai

イシナギ科の魚 *Polyprion oxygeneios*（ミナミオオスズキ）について、Phillipps(1947)では、若魚と成魚を区別して 2 段階の異なる名称を報告している。Williams(1971)はさらに大型魚 ‘large’を含めた 3 段階の名称を示している。

表 5：ミナミオオスズキ

学名（和名）	成長段階名称
<i>Polyprion oxygeneios</i> （イシナギ科 ミナミオオスズキ）	若魚 kopukopu > 成魚 hapuku ⁵
(w)	若魚 kopukopu > 成魚 hāpuku > 大型 hakurā

ボラ科の魚 *Aldrichetta forsteri* について Phillipps(1947)は、稚魚、若魚、成魚に加え、若魚と成魚の間の中間段階を加えて、合計 4 段階の異なる名称を報告している。Williams(1971)も稚魚と成魚の間に、「成長半ば」‘half-grown’と「若い」‘young’の 2 つの名称を示しているが、訳語ではこれらのどちらがより成長した段階を指すのか判断できないのでまとめて一つの区分とした。また、ボラ科のもう一つの種 *Mugil cephalus*（和名：ボラ）について、Phillipps(1947)は若魚と成魚の 2 段階の異なる名称を報告しているが、Williams(1971)でも母音記号が違う以外は同様である。⁶

表 6：ボラ

学名（和名）	成長段階名称
<i>Aldrichetta forsteri</i> （ボラ科）	稚魚 marahea > 若魚 maraua > 中間段階 matakā > 成魚 aua / ponaho ⁷
(w)	稚魚 maraua/marahea > 半成魚 / 若魚 matakā(half-grown) / pōnahō(young) > 成魚 aua
<i>Mugil cephalus</i> （ボラ）	若魚 tipara > 成魚 kanae ⁸

⁵ 類義語として kapua / whapuku / hakura / kauaeroa を挙げている。

⁶ tipara が tīpara と表記されている。

⁷ 類義語として kātaha, mokowhiti, makawhiti を挙げている。

⁸ 類義語として hopuhopu を挙げている。

スズキ目の魚である *Aplodactylus arctidens* (マーブルフィッシュ) について、Phillipps(1947) は成魚と老魚‘old’段階の 2 段階の区分の名称を報告している。Williams(1971)も同様である。

表 7: マーブルフィッシュ

学名 (和名)	成長段階名称
<i>Aplodactylus arctidens</i> ⁹ (マーブルフィッシュ)	成魚 kehe ¹⁰ > 老魚 katirimu

ムロアジ属の魚 *Decapterus koheru* について、Phillipps(1947)は稚魚、成魚とその間に半成魚 ‘half-grown’段階を加えた計 3 段階の区分の名称を示している。Williams(1971)でも母音記号が違ふ以外は同様である。¹¹

表 8: アジ

学名 (和名)	成長段階名称
<i>Decapterus koheru</i> (ムロアジ属)	稚魚 kotaratara > 半成魚 tangiharuru > 成魚 koheriheri / koheru

キュウリウオ目に属する小型の魚については極めて煩雑な状況となっている。これらの魚については、稚魚或いはシラスを表す‘whitebait’という記述も見られ、実際にシラスの状態で捕獲して食用にする魚種と考えられる。日本語の「シラス」が実際には、イワシ、ウナギ、アユ等複数の種の稚魚をまとめて指すのと同様に、マオリ語においても複数魚種間で名称の重なりが見られる。具体的には、同じキュウリウオ目ではあるが、*Galaxias maculatus* という種と *Retropinna retropinna* という種の間で成長段階名称の重複が見られることに加えて、後述するように、一部の名称については、これら二つの種以外の魚種の稚魚や若魚段階の名称とも重複が見られる。

Galaxias maculatus と *Retropinna retropinna* の両種とも、少なくとも、稚魚段階と成魚段階の間にもう一つ中間段階の計 3 つの区分が存在し、中には、成魚段階よりも先の段階を指す名称が存在する事例も見られ、更に同義語や方言名称も存在するため、全体として非常に複雑なものになっている。

Galaxias maculatus について、Phillipps(1947)では、稚魚、若魚、成魚、老魚の 4 段階の区分の名称が示されている。Best(1977)も若干異なる名称があるもののおおよそ同じである。また、両者とも「成長の第 2 段階」‘second stage of growth’を示す名称として ngauru という名称を示しているが、他で第 1 段階、或いは最終段階等への言及もなく、この第 2 段階というのが成長段階上でどの段階に相当するのか判別は困難であるため表には含めなかった。Williams(1971)も若干名称の移動があるもののおおよそ同じであるが、老魚段階への言及はな

⁹ 学名は *Aplodactylus meandrus* となっていたが、GBIF に従って修正した。

¹⁰ 類義語として ngehe が挙げられている。

¹¹ kōtaratara、kōheriheri / kōheru のように表記されている。

く、稚魚、若魚、成魚の3段階の名称を記載している。

表9：キュウリウオ目の魚 その1 *Galaxias maculatus*

学名（和名）	成長段階名称
<i>Galaxias maculatus</i> ¹²	稚魚 inanga > 若魚 kaeaea / koeaea / koputea / matamata ¹³ / ngorengore / porohe / tuarenga / uruao > 成魚 inanga / pokotehe ¹⁴ / karaha / karahi ¹⁵ > 老魚 pahore
(B)	稚魚 inanga > 若魚 kaeaea / koeaea / koputea / marearea / matamata / ngaore / ngorengore / porohe / tuarenga / uruao > 成魚 inanga / karaha / karahi ¹⁶ > 老魚 pahore
(W)	稚魚 inanga / ngorengore / tūarenga / uruao > 若魚 kāeaea / kōeaea / kōpūtea / matamata / pōrohe > 成魚 inanga / karahi / pahore / kāraha ¹⁷

これ以外にも特定の成長段階に関連する可能性がある名称として、Best(1977)が川から海へと下っていくものを指す atutahi /atutai、川を上っていくものを指す karohe を挙げており、Williams(1971)にも同様の記載が見られる。

同じくキュウリウオ目の *Retropinna retropinna* については、Phillipps(1947)では、少なくとも、稚魚、成魚とその中間段階の3段階の区分名称が報告されている。中間段階については若魚‘young’という区分(ngaore / ngaiore)と、半成魚‘half-grown’という区分(tikiheimi)が見られるが、成長段階においてこれら二つは同じ段階を指すのか違う段階を指すのか判断は困難なため、今回はまとめて一つの区分とした。Best(1977)では、稚魚、若魚、成魚に加えてもう一段階として大型魚‘large’を加えて4段階の区分名称を示している。Williams(1971)では稚魚と成魚の間に半成魚‘half-grown’の計3段階の区部名称が記載されている。

¹² Phillipps(1947)では *galaxias attenuatus* となっていたが GBIF に従い学名を修正した。

¹³ Waikato 方言との明記がある。

¹⁴ Phillipps(1947)の中で、pokotehe についての記載が2か所存在する。片方では‘adult minnow’（ここでは minnow は *Galaxias maculatus* を指す）、もう一か所では‘matured matamata’となっていた。matamata が *Galaxias maculatus* の若魚段階を表すとすれば、その「成熟した」段階は、*Galaxias maculatus* の成魚を表すことになり矛盾はないと思われる。Pokotehe も matamata も Waikato 方言との記載があるので、方言で別の系列が形成されている可能性がある。

¹⁵ pokotehe は‘adult’と表記されていたが、karahi/karaha は‘full-grown’と記載されていた。

¹⁶ Phillipps(1947)と同様に、karahi/karaha は‘full-grown’と記載されていた。

¹⁷ kāraha については‘full-grown whitebait which have spawned and are in poor condition’(*Galaxias attenuatus*)との記述があった。「完全に成長し産卵したシラスで弱っているもの」とあるので成魚を指すものと考えられるが、「弱っている」という状況が明示されていることから、他の成魚とは区分された段階を指している可能性がある。また、英語の whitebait は複数の魚種の稚魚を指す言葉であるが、ここでは学名 *Galaxias attenuatus* (*Galaxias maculatus* と同義)が明示されているので魚種は特定される。当初は、ここでの‘whitebait’「稚魚」と‘full-grown’「完全に成長した」が矛盾するのではと考えていたが、査読者から、ここでの whitebait は段階ではなくむしろ魚種を指していると解釈できるのでとの指摘があった。

表 10：キュウリウオ目の魚 その 2 *Retropinna retropinna*

学名（和名）	成長段階名称
<i>Retropinna retropinna</i>	稚魚 inanga > 若魚/半成魚 ngaore/ngaiore (young)/tikiheimi (half-grown) > 成魚 takeke
(B)	稚魚 inanga > 若魚 ngaore / (?)ngaore ¹⁸ > 成魚 tikiheimi / titiheimi / (?)titiheimi > 大型 takeke
(W)	稚魚 inanga / ngaore > 半成魚 tikiheimi > 成魚 takeke

表 9 と表 10 で見てきたように、*Galaxias maculatus* と *Retropinna retropinna* という 2 つの種をまたいで、inanga が同じく稚魚段階を表す名称として重複している他、稚魚と成魚の間の段階において ngaore も 2 種に共通して表れている。このような稚魚段階の名称についての種をまたぐ重複は、上述の 2 種に限ったことではない。断片的な情報しか得られなかったため表には含めなかったが、Williams(1971)によれば、表 9 中に登場した名称について、uruaio は上述の種以外にも *Galaxias fasciatus* やその他の種の稚魚段階を、matamata も上述の種の他に学名不詳だが nauhuri という別種の魚の若魚段階を、更に、pōrohe は上述の魚種とは科も異なるウナギやボラ等の若魚段階も表すと記載している。

その他のキュウリウオ目に属する魚についても成長段階名称が示されている事例がある。Phillipps(1947)では *Prototroctes oxyrhynchus*（ニュージーランドミナミアユ）について若魚と成魚の 2 段階の名称を報告している。Best(1977)と Williams(1971)もほぼ同じであるが、*Prototroctes oxyrhynchus* の若魚としては ara のみ明示されている。*Galaxias brevipinnis* という種について、Phillipps(1947)では若魚と成魚の 2 段階の名称が示されている。Williams(1971)も長母音記号が異なるだけで基本的に同様の 2 段階を記載している¹⁹。また、学名不詳であるが、同じく *galaxias* 科に属する種の魚について、Phillipps(1947)が若魚と成魚の 2 段階の名称を示している。Best(1977)と Williams(1971)も同様の 2 段階の名称を示している。

表 11：その他キュウリウオ目の魚

学名（和名）	成長段階名称
<i>Prototroctes oxyrhynchus</i> （ニュージーランドミナミアユ）	若魚 ara ²⁰ / tirango > 成魚 upokoro / upokororo ²¹
(B)(W)	若魚 ara > 成魚 upokororo
<i>Galaxias brevipinnis</i>	若魚 miroiti > 成魚 koaro / kowaro
学名不詳(<i>galaxias</i> 科)	若魚 kōawheawhe > 成魚 para

¹⁸ Best(1977)で付されていた？をそのまま記載する。

¹⁹ 成魚が kōaro / kōwaro と表記されている。

²⁰ 類義語として nehe が挙げられている。

²¹ 類義語として、pokororo / pancoro / tirango / kanae kula が挙げられている。

3. マオリ語における魚の成長段階名称の区分と形成法

前章で示した一覧から、マオリ語における魚の成長段階名の区分の仕方について以下のような特徴が指摘される。

- (1) シンプルな2段階或いは3段階の区別をする事例が多かったが、最大で4段階の区別をする事例も見られた。今回の分析対象で、学名により種が特定されている13種のうち、参照した3つの文献の少なくとも1つ以上で4段階の区別を表す名称が指摘されていたのは *Arripis trutta* (オーストラリアサーモン)、ボラ科の *Aldrichetta forsteri*、キュウリウオ目の *Galaxias masculatus* と *Retropinna retropinna* の4種である。
- (2) 複雑な成長段階区分としては、若魚と成魚の間にもう一つの間段階(「ほぼ成魚」等)が存在する場合(*Arripis trutta*、*Aldrichetta forsteri*)と、成魚段階よりも、更に年を経た老魚段階に対して別の名称が付与される場合(*Galaxias masculatus*)、或いは、更にサイズの大きくなった大型魚段階に対して別の名称が付与される場合(*Retropinna retropinna*)があった。
- (3) 成魚段階でかなり大きなサイズになる魚(ウツボ、マダイ等)だけではなく、成魚段階でもかなり小さなサイズにしかない魚(キュウリウオ目の魚、ボラ等)についても細かい成長段階に対して別名称を付与している事例が見られた。

成長段階名の形成法としては、以下の2通りの場合が見られた。

- (4) 成長段階の名称と形式的に全く異なる独立した名称で同じ魚種の別の成長段階を示す。
例: *Mugil cephalus* (ボラ) 若魚 *tipara* > 成魚 *kanae*
- (5) その魚種の代表的名称に、特定の成長段階を表す別の要素が結合された分析的名称で示す。例: *Pagrus auratus* (マダイ属の魚) の稚魚 *pepe tamure* とウナギ(種は特定せず)の稚魚 *tuna-riki*²²。

圧倒的多数で見られたのは(4)、すなわち、狭義の出世魚のように他の成長段階と形式的に全く異なる独立名称を用いる方法であったが、(5)の方法も、わずか2例ではあるが見られた。

もう一点、マオリ語の魚の成長段階名称について特徴的であったのは、同じ魚種の同じ成長段階について別名が多く存在することである。例えば、*Arripis trutta* (オーストラリアサーモン) の若魚段階を表す名称として、*kohere* / *koria* / *koukauka* / *kungogingoungi* / *kowaitau* / *kōwerewere* のように6つの別名が挙げられている。このような別名の多さは成魚段階でも見られるが、稚魚段階や若魚段階で特に顕著である。

²² *pepe tamure* において *tamure* はマダイ属の魚の成魚の名称であるが、Williams(1971)はこの *pepe* を‘close together’を表す *pepe* の第2義としているが、もしかすると外来語‘baby’由来の可能性も疑われる。*tuna-riki* は前述したように、*tuna* は「ウナギ」と *riki* 「小さい」の結合である。

4. ハワイ語及びサモア語における魚の成長段階名との対照と考察

まず、魚の成長段階名称の区分として、前章の(1)として挙げた、成長段階の区分の数について比較する。塩谷(2017)によると、ハワイ語においては、シンプルな2段階を区別する事例が最も多く、段階数が増えるにつれて事例数は減少したが、最大で5段階の区別をする魚種があることが示された。また、塩谷(2022)では、サモア語でも、シンプルな2段階の区別をするものが最も多く、次いで3段階の区別をするものが多く、4段階以上の区別を持つものはそれぞれ一つか多くても二つの魚種しかなかったが、最大で7段階の区別をするものがあった。マオリ語においても、シンプルな2段階或いは3段階の区別をするものが多かったが、多くても4段階が最多であり、その意味では、少なくとも得られたデータの範囲では、ハワイ語やサモア語の方がマオリ語よりも複雑なシステムを有していることが示された。しかしながら、前章でも述べたように、マオリ語では同じ魚種の同じ成長段階を表すとされる別名が顕著に多く存在していることが示されている。同じ魚種で同じ成長段階を示す名称が多数存在するというのは言語の経済性の観点から考えてむしろ不自然と思われる。これらは方言差によるものであるという可能性もあるが、それ以外の可能性として、もしかすると、今回参照した資料で同じ成長段階を指す別名とされているものは、実際には微妙に異なる成長段階を表す名称であるのにそれが記録され損なっていた、或いは、かつては異なる成長段階を表していたが、現在はそのような細かい区別が失われてしまった、ということに起因する可能性がある。

次に、(2)として挙げた、細かな区分の仕方について比較する。2段階のシンプルな区分から、成長段階を更に細かく区分していく場合に、どのように細分化しているか、その方法について3言語を比較する。塩谷(2017)及び塩谷(2022)は、ハワイ語及びサモア語においては、成魚段階の手前にもう一つ中間段階の名称を設けている事例が最も多く見られるものの、標準的な成魚段階よりも更に育ってサイズが大きくなった大型魚を示す名称が存在する場合も相当する見られることを示した。今回分析したマオリ語においても同様に、成魚段階の手前にもう一つ中間段階の名称を設けて別の名称を付与している事例と、標準的な成魚段階よりも更に育ってサイズが大きくなった大型魚、或いは更に年を重ねた老魚に別の名称を付与している事例とが見られた。若い魚と成魚の区別は漁業上重要な区別であることは自然であるが、大型魚や老魚についても別名称を付与するという点は注目すべきである。日本語でも、出世魚の一つであるボラについて、標準的な成魚はボラであるが、極めて大きい特大サイズをトドと呼ぶのと同様の事例と言える。

最後に、(3)であげた、成魚段階でもかなり小型の魚に対しても細かい成長段階の区別に名称が付与されているという特徴について述べる。塩谷(2017)と塩谷(2022)において、ハワイ語とサモア語でも、今回のマオリ語と同様に、カツオやロウニンアジ等成長するとかなり大きくなる魚だけではなく、ボラ、ヒメジ等成長してもかなり小型にとどまる魚に細かい区分の名称が付与されていたことが示されている。今回分析したマオリ語でもその傾向は顕著であった。特に、マオリ語では、成魚段階でもかなり小型の魚であるキュウリウオ目の魚についてかなり複雑な成長段階区分名称が見られた。これらは、前述したように、今回のマオリ語

関連の参考文献の中で、whitebait「シラス」という表現で言及されていることからわかるように、日本のシラスと同様、稚魚の段階で収穫して食用とする重要な食材であったため、これらの魚に対する高い関心が語彙の細かさに反映したものと考えられる。

成長段階別名称の形成法についてあるが、他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合がほとんどだが、その魚種の代表的名称に別の要素が結合された分析的名称を用いる場合も少数ながら見られるという傾向は、塩谷(2017)と塩谷(2022)においてハワイ語とサモア語について指摘されたことと同一である。

4. 結び

ポリネシア諸語における魚の成長段階名称についての先行研究として、ポリネシアの最北端に位置するハワイ語、西に位置するサモア語について分析したが、今回は、最南端に位置するニュージーランドのマオリ語についての分析を行った。概して、これら3言語間には大きな類似が見られることが分かった。今後の計画としては、最東端に位置するラパヌイ語と、中心部に位置するタヒチ語及び仏領ポリネシア内の言語についても同様の分析を行い、ポリネシア諸語における魚の成長段階名称全体的な特徴について明らかにしていきたい。その際、それぞれの魚種の用途（食べ方、食用とする部位、貴族への献呈等）、漁獲法、漁獲量等、成長段階名称の細かさや区分に影響すると考えられる様々な要素についても併せて考察の対象に含めていきたい。

謝辞

* 二名の匿名の査読者から貴重なコメントを頂いた、この場を借りて謝意を表したい。

参考文献

- Best, Elsdon. (1977) List of Maori names of fresh-water fish other than eels. *Fishing Methods and Devices of the Maori*. 198-201. Wellington : E. C. Keating. (New Zealand Electronic Text Collection <https://nzetc.victoria.ac.nz/> 最終アクセス 2023 年 1 月 15 日)
- Global Biodiversity Information Facility, Free and open access to biodiversity data. (<https://www.gbif.org> 最終アクセス 2023 年 1 月 15 日)
- 木村浩之. (2020) 『日本産魚類全種目録』. 鹿児島: 鹿児島大学総合研究博物館.
- 日本魚類学会. (1981) 『日本産魚名大辞典』. 東京: 三省堂.
- Phillipps, William J. (1947) A list of Maori fish names. *Journal of the Polynesian Society*. Vol. 56 No.1. 41-51.
- POLLEX-Online (<https://pollex.shh.mpg.de/> 最終アクセス 2021 年 12 月 24 日)
- 松田徳一郎 (監修). (1996) リーダーズ+プラス CD-ROM 版. 東京: 研究社.
- 塩谷亨. (2017) ハワイ語における魚の成長段階名称について. 『北海道言語文化研究』第 15 号. 95-107.
- 塩谷亨. (2022) サモア語における魚の成長段階名称について. 『北海道言語文化研究』第 20 号. 91-111.
- 澁澤敬三. (1992) 「日本魚名の研究」. 『澁澤敬三著作集』第 2 巻. 9-391. 東京: 平凡社.
- Williams, Herbert W. (1971) *Dictionary of the Maori Language 7th edition*. Wellington : Legislation Direct

(Reprinted in 2003.)

執筆者紹介

氏名：塩谷 亨

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp